

SONRISA

そんりさ

Vol.123



K. YAGAPOTO

「そんりさ」はスペイン語で「微笑み」を意味します。私たちレコムは様々な活動を通じてラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

「やより賞」記念ツアー報告

- | | | |
|----|----------------------|-------------|
| 2 | 「やより賞」記念ツアー報告 | : 柴田修子 |
| 10 | コロンビア難民再訪 | : 柴田大輔 |
| 15 | 本紹介「サヨナラ 自ら娼婦となった少女」 | : 松本楚子 |
| 16 | ボリビアだより その2 | : 藤田護 |
| 20 | ホンジュラスクーデター後の総選挙 | : 新川志保子 |
| 21 | ラ米百景 伝記か物語か、冴える魔術的筆致 | : 伊高浩昭 |
| 23 | 音楽三昧♪ペルーな日々 | : 水口良樹 |
| 25 | メキシコ食巡り | : ミゲル・アクーニャ |
| 26 | ニュースクリップ | |

やはり賞受賞記念ツアー報告

戦時性暴力の被害者から変革の主体へ

グアテマラの戦時下性暴力のプロジェクト「戦時性暴力の被害者から変革の主体へ」が二〇〇九年度の「女性人権活動奨励賞」(やより賞※)を受賞しました。それを記念して、プロジェクト代表二人による日本国内のスピーキングツアーを行いました。以下はその報告です。

「戦時性暴力の被害者から変革の主体へ」プロジェクトとは

グアテマラ内戦中(一九六〇～一九六)に性暴力にさらされた女性たちのエンパワーメントとメンタルヘルスを組み合わせたプログラムで、一人ひとりが尊厳を取り戻し、みなで正義をめざすプロジェクトです。現在グアテマラの四地域から一〇〇人の先住民女性性が参加。二〇一〇年には、じぶんたちの力で、性暴力の不当性を裁く「民衆法廷」を開こうと準備を進めています。

来日した代表二人の紹介

マリアナ・チュタさん 一九六三年、チマルテナンゴ県サンホセ・ポアキル郡サキタカハで生まれる。現在四六歳。七九年一五歳の時結婚して同ポアキルにあるパナヤに移る。同時に、

教会系の団体や外国NGOによる農村開発支援のプロジェクトなども行われ、マリアナさんは積極的に参加する。人権団体による先住民の権利講座などにも参加した。その頃から軍の弾圧が激しくなり、村の中で行方不明者が出始めた。結婚して四年目一九歳の時、プランテーションに出稼ぎに行つてしばらく留守にしていたのをゲリラに入ったからと疑われ、夫が軍に連れ去られる。GAM(強制失踪者を探す家族の会)やコナビグアなどに参加して必死で夫を探す、見つからず、軍に追い返される。夫は以降行方不明のまま。マリアナさん自身も軍の弾圧を受け、性暴力の犠牲となる。その時マリアナさんは三歳と一歳の娘、そしておなかに赤ちゃんがいた。その後は、三人の娘を養うために必死で働く。他の寡婦とともに、教会や外国NGOなどの支援を得て、女性の協同組合を作りそれに参加する。五年間保健プロモータの講座を受講し、資格を取り、二〇〇〇年より保健プロモーターとしても活動している。

アイデー・ロペスさん ウエウエテナンゴ

県サンアントニオ・ウイスタの出身。三二歳。心理学者。子どもどきに軍の弾圧を受け、亡命を余儀なくされた家族とともにメキシコに渡り、そこで一八年の亡命生活を送る。メキシコ時代からNGOグアテマラ人権コミッション(CDHG)の活動に参加し、グアテマラにおける人権侵害の告発や女性グループを対象にした人権ワークショップなどの活動を行った。グアテマラに戻ったのは内戦が終結する一九九六年。二〇〇四年よりECAPの仕事始める。ウエウエテナンゴ県での秘密墓地の発掘同行などを経て、「変革の主体」プロジェクトのメンタルヘルス担当に。チマルテナンゴでの活動の後、現在はアルタ・ベラパス県とイサバル県(ケクチ語地域)で三つのグループ六〇人の女性とメンタルヘルスのセッションを行っている。三歳の娘を持つシングルマザー。

講演記録

二〇〇九年二月六日京都の記録を
中心にまとめました。

アイデー・ロペスさん

皆さんこんにちは。最初にグアテマラ内戦中に起きた女性に対する暴力がどのような意味を持っていたかをご説明したいと思います。女性に対する暴力は、ゲリラの妻や妹、母、娘を強姦することで、そのゲリラに処罰を与えるという意味がありました。それと情報を得るために

暴力が行われた場合もあります。ゲリラへの協力者がどこにいてなにをやっているのか暴行して聞きだすのです。またそうした行為によって人々に恐怖＝テロルを与えるという意味もありました。

女性に対する性暴力は、グアテマラにおけるジェノサイドの一環としても行われましたし、女性たちが軍の基地に連れ込まれて強姦される場合もありました。アルタベラパス県には一〇年間にわたって性奴隷として兵士たちの相手をさせられた女性たちもいました。

女性に対する性暴力は、共同体、家族、個人レベルで大きな影響をもたらしました。グアテマラの伝統的な価値観では、女性に三つのことが要求されます。処女で結婚すること、結婚してからは夫に貞操を尽くすこと、そして子を産み母となること、です。この価値観から見れば、強姦された女性は「穢れて」いるわけで、共同体からつまはじきにされたり、どうせ穢れているのだからと男性たちに再度強姦される場合もありました。家族のレベルでは、強姦されたことを夫に告白したとき、夫が怒って妻に激しい暴力をふるったり、ひどい場合には殺されるケースもありました。個人レベルでは、被害を受けた女性は大きなショックと強い恐怖感を植えつけられ、それがトラウマとなつてずっと心に残るのです。そして起こったことへの羞恥心から自分自身を責め、それを抱え込んで大きなストレスとなります。生殖器系の病気になつたり、精神を病むこともあります。アルコール依

存症になつてしまった女性もいます。

そこでこの「変革の主体へ」プロジェクトでは、被害を受けた女性たちが正義と尊厳を取り戻すために活動し、それを通じてグアテマラの社会にも正義と尊厳をもたらすことに貢献したいと考えています。現在プロジェクトには、ウエウエテナンゴ、イサバル、アルタベラパス、チマルテナンゴの四県から約一〇〇名のマヤ先住民女性が参加しています。皆スペイン語の読み書きを学ぶ機会を持てなかつた農村部の女性たちです。ほとんどは母語である先住民言語のみを話し、貧困層に属し、内戦で夫を奪われ、寡婦であるために共同体の活動に参加することもできずにいます。女性たちは子どもあるいは孫のめんどうを見ながら生活しています。

このプロジェクトには二つの戦略があります。一つは、参加女性が女性としての自分の権利を知り、エンパワメントに結びつけることで、そのためのワークショップを開催しています。もう一つは、社会心理学の立場から女性に寄り添うことです。具体的には、距離の近い女性たちで互助グループを作って語り合う場を設けたり、壁画や粘土などのアートセラピーを行つていきます。個人的な問題を抱えている場合には専門家がアテンドし、病院に付き添うこともあります。また政府の全国補償プログラムに申請する手伝いをすることもあります。

性暴力の歴史的記憶を残し人々に知ってもらう活動も行っています。まず、マヤの四つの言語でラジオ番組を放送しています。「ビクトリ

ア（勝利という意味）は沈黙を破つた」というタイトルの連続ラジオ小説を作つて放送しています。ビクトリアという女性がつらい経験を乗り越えていくストーリーを、さまざまな女性の経験と記憶を参考に作つたものです。またこのテーマのパンフレットや冊子を作成してさまざまな団体に配つて意識化を進めています。女性たちの経験は『沈黙をやぶつて―内戦における性暴力被害女性に正義を』という本にまとめ出版されましたし、三年にわたる調査研究の成果をまとめたもう一冊が出版される予定です。

私たちの目的は正義（加害者の処罰）の実現ですが、いまのグアテマラの状況では裁判を起すことは非常に困難です。当初の目標は反乱鎮圧戦略を指揮した軍の責任者を告発し、裁判の場にひきずりだすことでした。国家戦略のなかに女性に対する性暴力が組み込まれていたことを立証し、国家の責任を明らかにすることです。しかし現実には難しく、性暴力の問題だけでなく農民運動であれ、人権活動を行うとグアテマラでは死の脅迫を受け、実際に被害されることもあります。そこで参加女性たちと話し合いを重ね、いまの段階では裁判を起すのは現実的ではないという結論にいたしました。そして正義という言葉を広くとらえ、別の観点から正義を追究しようということで、考えたのが「民衆法廷」を開催するということです。来年（二〇一〇年）に予定しています。この法廷は、五つの組織が共同で開催します。コナビグア（連れ合いを奪われた女たちの会）、「世界を

変える女たち」(フェミニスト女性弁護士士の組織)、ラ・クエルダ紙(女性新聞)、そしてこのプロジェクトを行っている社会心理行動と共同研究グループ(ECAP)、グアテマラ全国女性連合(UNANG)です。

私たちは、グアテマラ政府にも出席を呼びかけています。政府の代表に女性たちの告発を目前で聴いてもらいたいと思いますし、判決が出たらそれを真摯に受け止めてほしいと願っています。内戦が終結して一三年経ちますが、いまだに国家は性暴力が行われたことすら認めていません。まずは事実を認め、そしてその責任をとることを私たちは望んでいます。

マリアナ・チユタさん

皆さん、こんにちは。今日はここに招かれてとても嬉しく思っています。私はチマルテナンゴ県、サンホセ・ポアキルというところで生まれました。一五歳で結婚しました。その頃から私の村でも軍による弾圧がひどくなっていきました。四人の人が拉致され、数日後にむごたらしい死体で見えられたのを始めとして、多くの人が行方不明になったり殺されたりしたので。私の夫は一九八四年に軍に連れて行かれました。夫の行方を探して軍の駐屯地に行ったり、GAM(強制失踪者を探す家族の会)やコナビグアなどに参加して首都でデモ行進をしたりしましたが、結局夫がどこでどうなったのかわからないままです。私自身もこのような活動をして、軍から殺されそうになりました。兵士たち

の性暴力の犠牲になったのもこの時期です。村にいられなくなって、まだ小さかった娘たちを抱えて、ポアキルの町に逃げました。軍の暴力を逃れて多くの人が遠くの山の中や、首都や、近隣の町に逃げ込んだのです。ポアキルでは、最初住むところもなく、一帯の村から逃げてきた女性たちと一緒に住んでなんとかその日その日をしのぎました。私たちは三〇〇人いたのですが、教会の前の大きな木の下で集まって、これからどうしようかと話し合ったのを覚えています。私たちが集まるたびに軍がやってきて見張られ、私たちはゲリラだと非難されました。私たちは子どもを抱えてどうやって生き延びようかと話しているだけだったのに。そのうち、カトリックのシスターから支援を受けて、織物をして、それを売ったりできるようになっていったのです。それでもみんなが食べていくためには、住む場所もトウモロコシを植える畑もいるし、もっと資金が必要で、外国のNGOに援助を申請すればよいと教えてもらいました。といっても、私たちは誰もスペイン語ができませんでした。私はグループの中で若い方だったので、必要に迫られて必死でスペイン語を勉強しました。そしてシスターに助けてもらって申請書を作ったりしたのです。そうやって少しずつグループの活動が軌道に乗っていききました。やがて、協同組合として法人格もとることができました。去年はこのグループができてから二五周年で、お祝いをしました。

でも、協同組合の仲間たちにも、自分が受けた性暴力については話すことがなかったのです。それぞれの経験は違うし、私を受けたことは私だけに起こったことだと思っていたのです。他の人に話すなど、考えたこともありませんでした。あの後私は病気になる、一年ほど苦しみました。このまま死んでしまいうらうと思つたほどでした。ところが三年前、全国補償プログラムに申請に行った時に知り合った女性に、この「変革の主体」プロジェクトに誘ってもらいました。そこで初めて、私は自分に起こったことを話すことができたのです。他の女性たちも性暴力の被害者であることも知りました。自分だけに起こったのではないと知りました。そして、起こったことで自分を責めるのは間違っていることを知つたのです。このプロジェクトの女性たちとは姉妹のように信頼しあうことができ、初めて胸のうちを明かすことができました。私の人生がここで大きく変わったように思いました。

また、プロジェクトのおかげでさまざまなワークショップに参加し、いろいろなことを覚ええました。手仕事を習ったり、メンタルヘルスや紙粘土で人形を作って自分を表現しました。やったことないものばかりで、最初はできないと思いましたが、プロジェクトの人たちが助けてくれました。

また、それまでは自分に価値があるなどと考えたことはなかったのですが、プロジェクトに参加して、自分にも価値があり、権利を持っていると知りました。いまは私たち一人一人が価値

値のある存在だと思おうようになりました。プロジェクトを通じて、私自身大きく変わったと思います。以前は人前で話すなんて考えられませんでした。起こったことは、思い出すだけでふるえるほど怖い経験だったけれど、話すことで乗り越えられ、強くなっていくのを実感しています。皆様のおかげ、プロジェクトの人たちの支えのおかげだと思います。

三年前、参加して間もない頃ですが、ウエウエテナンゴという私の住む県からかなり離れた県でプロジェクトに参加している女性たちと交流する機会がありました。これは私にとっても大きな経験でした。国のあちこちで起こっていたことを知るのに役立つし、女性たちと交流することは大きな力となりました。またその後三つの県の女性たちが集まる機会もあり、それもいい経験でした。これから開かれる民衆法廷に私たちは参加しますが、仲間の女性たちも私もこの開催をとて嬉しく思っています。「団結は力なり」という言葉がありますが、まさにそのとおりで一人ではなにもできなくても、集まれば大きな力になります。一人一人が集まり、NGOの皆さんの支援もあってやっと実現する法廷です。これは闘いです。少しずつでも私たちは前進していくつもりです。

仲間を代表して、皆さんの支援に感謝します。日本に招いてくれた皆さん、会場に集まって私の話を聞いてくださった皆さんに感謝します。



「やより賞」の贈呈式

ダンス アートセラピーの一環で行っているダンスと歌を披露。大変な経験をしているが、それだけではなく人生には喜びも大事ということでオブリジェを作ったり絵を描いたり、ダンスを踊る。

ダンスは「キチエの王様」というグアテマラでとてもポピュラーなマリンバ演奏の曲。歌は、カクチケル語。男性から女性に求愛する歌。

質疑応答

Q1 被害を受けた女性がこうした活動に参加するのはとても大変なことだと思うが、女性たちが参加しやすくなるような工夫をされているのか具体的に教えてほしい。また、アートセラピーについてもくわしく知りたい。

アイデー なによりもまず、信頼と安全を保証することです。女性たちが参加するためには、彼女たちと私たちのあいだに深い信頼関係がなければなりません。そしてここで話されたことは外に決してもらさないと保証することです。それから、彼女たちが話した内容に対し、批判や判断をくみださず、聞くことに徹するということです。

話し合いの最初に、なぜこういうことをするのかよく説明し、理解してもらいます。一人の女性に起きたことは孤立した問題ではなく、同じ被害を受けた女性たちが数多くいること、個人を超えた内戦という枠組のなかで行使された構造的な問題なのだとすることを説明します。

メンタルヘルスの互助グループのワークショップでは、まず参加者が一番話したいことを聞くようにします。そして、現在の苦しみは過去の出来事とどう結びついているのか、過去と現在をつなげて考えるようになります。互助グループでの集まりにはいくつか決まりがあります。まず男性と子どもは参加できないこと、話したことは外にもらさないこと、参加者は来たいときに来る（いやになったらいつでもやめて

いい)、こちらからは質問しないで参加者が話したいことを話してもらうということです。互助グループに参加していることを周りに知られたくない場合は、その意志を尊重します。名前を出したくない女性の名前は決して外にも知らせませんし、家族に知られたくなければこちらから連絡することのないようにします。

アートセラピーは、女性たちに正義と平和をもたらす活動の一環です。過去に起きた歴史を回復すること、問題を可視化するという役割があります。資料集の表紙にある壁画はウエウエテナンゴの女性たちが描いたもので、彼女たちがどういうことが起きたか、それが個人や家族、共同体にどのような影響をもたらしたかを表現しています。これは女性たちの歴史やメッセージを表現する媒体で、性暴力については社会の扉が閉ざされていて語ることすら難しいですが、絵を通じて女性たちに起きたことを社会に少しでも知ってもらいたいと思っています。紙粘土も同じです。塗らした古新聞などを利用して作っていますが、彼女たちにとっては歴史を語り、つらい記憶を具体的に形に表すという点で、とても重要な意味を持っています。

Q2 プロジェクトを通じて、共同体のなかで女性の位置づけは改善されたか？ 家父長的なあり方を変えるようない影響はあったか？

アイデー 私たちのプロジェクトでは、いまのところ共同体全体を視野に入れた活動は行っていません。家族に知られたくない女性もいて、

村に入って男性と話すことは非常に難しいからです。男性に働きかける活動自体ほとんどありません。家族の協力が得られていて家族の意識を変えたいと望む女性については、その夫や兄弟、息子と話すこともあります。あまり数は多くありません。現在ウエウエテナンゴ県とアルタベラパス県でそういう取り組みを始めています。

ただ私たち自身、男性を対象とした方法論を持っていないので、男性の専門家を探して男性同士でもらうようにしています。女性が入らないことでこれまで語れずいたことを吐き出す機会になるからです。男性にも苦しみがあり、妻を守ることができなかったことや、実際内戦中ゲリラとして参加し自分の家族に迷惑をかけたことに対する罪悪感などを抱え込んでいる人もいます。

Q3 男性に対するメンタルヘルスの活動は、グアテマラにはあるのか？

アイデー グアテマラでは、メンタルヘルスはほとんどNGOによって支えられています。政府では保健省が一応扱っていますがごくわずかで、しかも医療機関が行うため被害者に寄り添って自己肯定感を高めるようなものにはなっていません。NGOの取り組みとしては、たとえばECPAは男性、女性両方にメンタルヘルスを行っています。とりわけ家族の問題、内戦中の政治的暴力のサバイバーのためのプログラムがあります。

Q4 これまでの活動で一番印象に残ったことは？ 自分に価値があると感じるようになったプロセスを教えてください。

マリアナ このプロジェクトに参加するまでは、私たちが支援してくれる人がいるなんて知りませんでした。一人一人がそれぞれの村に住んでいて、ばらばらでした。でもこの活動に参加するようになって、私は精神面で大きく変わりました。それまでは自分が悪かったと思ひ込み、自分を責めていました。このプロジェクトと出会って、メンタルヘルスなどのワークショップに参加することができ、女性としての私たちの権利を学びました。私たち女性は性的暴力を受けたら、それを申し立てる権利があるのです。正義を求めて裁判をするのは重要なことです。なぜなら私たちの人生に起きたことは、正しくないことなのです。仲間も私も満足しています。私たちにアテンドしてくれる人たちは、敬意を持って私たちの話を聞いてくれます。やっと自分たちが抱えている問題を話す機会を得たのです。村では話すことができません。なぜならみんなに批判されたり嘲笑されたり、売春婦といわれることすらあるからです。だから村では話せなかったのですが、神のおかげで、私は大きく変わったのを感じています。

Q5 民衆法廷の進行について被告、判事、証言者、傍聴の仕方などを教えてください。右翼からの妨害や困難は？

アイデー 被告はグアテマラ国家です。グアテマラ国家の犯罪を暴くのが目的です。性暴力は内戦中における国家戦略の一つだったからです。軍がどのような構造になっていて、指揮系統がどうなっていたか、専門家証言を交えて明らかにしたいと思っています。そこを明確にして初めて個人の罪を特定することができます。でも私たちは、数名の加害者を特定しようとしているのではなく、内戦において性暴力がどのようにに戦略として用いられたかを問題にしたいのです。

判事は三人予定しています。確定しているのはスサナ・ビジャランさんと、米州人権委員会の判事を務めている法律の専門家です。あとはコナビグア代表のロサリナ・トゥユクさん、もしくはリゴベルタ・メンチュウさん、もう一人は男性に依頼します。スペインでジェノサイド裁判を開始したバルタサル・ガルソン判事にお願いたしたいと思っていますが、現在交渉中です。

裁判は公開制で、誰でも参加できます。少しでも多くの人に来て欲しいと思います。証言は、プロジェクトに参加している女性全員が行います。ただし、女性たちの身元がわかると法廷の後で問題が起こる危険があります。国家を相手取って公衆の面前でマスコミもいるなか、自分の名前や姿がさらけだされるのは怖いものです。村に戻ってなにかよくない影響が出ないとも限りません。なので、多くは顔がわからないようにしてビデオでの証言をするように考えています。当日証言したい女性には、もちろん証

言台に立つてもらいます。

妨害はおそらくあるだろうと思います。グアテマラでは女性問題に限らず人権活動を行おうとすると、嫌がらせや死の脅迫を受けます。それに対抗するためなるべく多くのNGOと協力体制をとっています。グアテマラ国内ではまだ民衆法廷の日付や場所を公表していません。直前に発表するつもりです。

メディアキャンペーンは、国際女性への暴力撤廃デーである一月二五日に開始しました。ラジオで民衆法廷のことを宣伝しています。キャンペーンは三つの段階からなっていて、まずはジェンダー暴力について皆に知ってもらうこと、そして正義を求めることの必要性を説くこと、そして三つめの段階として法廷の二、三週間前に詳細情報を公開する予定です。

政治圧力や嫌がらせに対抗する重要な手段は、国際的な連帯だと思います。グアテマラ政府に対して、関係者の無事を保証するよう国際的な圧力をかけることが重要です。

こういう活動をしていると、常に恐怖があります。誰もが恐怖心を抱えていると思います。それでも続けるのは、不正義に対する激しい怒りがあるからです。憤りにかられてなにかしなくてはと行動するのです。そしてなによりも重要なことは、こうした活動が誰かのために役に立っていると感ずることです。脅迫を受けるのは、活動にそれだけのインパクトがあり、相手にも恐怖を与えている証左です。憤りによって内に抱える恐怖を乗り越えて、活動を続けてい

ます。

Q6 (マリアナさんに) 日本に来るにあたって、仲間たちはどう言っていたか？ (アイデーさんに) 国際的な取り組みとしてどのようなものがあるか。日本の私たちはなにができるか？

マリアナ チマルテナンゴのミーティングで、ICBPの人が私の日本行きを仲間たちに発表しました。仲間たちは賛成してくれて、旅を私たちのことを知ってもらう機会にするようにといわれました。よそに行っているいろいろな人を知り合い、私たちのことを話すのはいいことだという仲間もいました。なぜなら、私たちは誰にも聞いてもらえないと思いついていたからです。この国で起こっていることを知りましたが、いる人たちがいるのを私たちは知りませんでした。私が日本に行くのを喜んでくれていました。日本の仲間たちによるしくとのことです。

アイデー 国際社会からの支援に関しては、国内ではNGOのネットワークを作っているほか、在グアテマラの各国大使館と連絡を取っています。いくつかの大使館は、プロジェクトに賛同してくれていて、資金援助をしてくれた国もあります。国連については、国連人権高等弁護事務所と連絡を取っています。民衆法廷開催には、政治的圧力ももちろん重要ですが、必要な資金もまだ集まっています。経済的な面でも援助を必要としています。

Q6 社会心理学とは何ですか

アイデーさん 個人の感情や心理的な問題を、社会的、歴史的なコンテクストで捉え、解釈することです。つまり、個人に起こったことは単に個人的なことではなく、それをとりまく社会的な状況や権力構造の影響を受けているとする考え方です。

浅井さんの感想

貴重な時間をいただきます。日本軍性奴隷問題の解決を求めて活動している浅井です。先週韓国ナムルの家からおばあさんに来てもらって証言集会を開きました。大勢の方に集まってもらい、ありがとうございます。なにを言ったらいいかと思っていたのですが、私がいかに感銘を受けたのは、内戦からまだ一三年でこれだけの取り組みをおこなっていることに本当にびっくりしました。それはなぜかという点、日本軍性奴隷問題の場合被害にあわれた方が戦後五〇年近くたって名乗り出て、やっと社会問題になったからです。日本に住む私たちもそうですが、女性たちは戦後すぐこの問題に取り組むことはできませんでした。被害に合った女性たちはずっと孤立して暮らしてきたわけです。ところがグアテマラではこうしたNGOが活動し、すでに一〇〇人以上の方々に参加していると聞いてびっくりしましたし、感銘を受けました。それだけすぐく進んでいるなど私は思いません。私も被害に合ったおばあさんたちと交流していますが、ワークショップなどに参加して被害に合った人同士が交流しあうとか、プログ

ラムが行われることがどれだけ被害の回復につながっているかを見ることがあります。それを具体的にされているというすばやさ、そして妨害があるなかで社会に根をはってされていることに、感動しました。私たちもそれに学んで、被害に合われた方は高齢なんですけど、できることをやっていきたいと思います。本当にどうもありがとうございます。

アイデーさんの感想

最後に、皆さんにお時間をさいて来ていただいたことに感謝します。またいまのコメント下さった方にも感謝します。五〇年経つてからであつても、皆さんの取り組みがなければいま私たちがここにいることはなかったでしょう。私たちのプロジェクト自体もなかったかもしれない。日本とグアテマラは距離があり、起きたことに違いがあるとはいえず、皆さんが始めたことで今の私たちがあります。そういう意味では、物理的に参加していなくても皆さんも民衆法廷の一部をなしているといえます。こういうことを知って、個人的にも大きな希望と勇気をもらいました。来年三月の法廷にはぜひ皆さんの心も寄り添ってほしいと思います。実際にきていただければ嬉しいですし、来られなくても、日本政府に電話して大使館を通じてなにかするべきだと言ってもらおうとかグアテマラの記事を探すなどなんらかの形で関わったり、心のどこかで考えていただければと思います。皆さんが応援してくれていると知ることが、私たちにとつ

て大きな力になります。

マリアナさんの感想

ここにお集まりいただいたことに感謝します。日本に来られてとても嬉しいし幸せに思っています。志保子の支えなくしてはここまで来られなかったのです。彼女は幸せに思うと同時に、悲しみもあります。私は幸せに思うと同時に、悲しみもあります。なぜならつらい過去があるからです。夫は誘拐されていなくなり、たくさん問題を抱えています。でも神のおかげで支えてくれる人がいて、ZOOもあります。民衆法廷を実現するために支援してくれる組織もあります。女性として私たちは闘い、民衆法廷をやりとげなくてはならないのです。ここに来てくれる皆さんには、心から感謝します。本当にどうもありがとうございます。(まとめ 柴田修子)

ツアー日程

- 京都市 12月6日(日) 14:00～
京都アスニー(3階)
- 神戸市 12月7日(月) 16:00～
神戸市外国語大学 208 教室
- 札幌市 12月8日(火) 18:30～
札幌エルプラザ 環境研修室 2
- 札幌市 12月9日(水) 12:30～
北海学園大学
- 横浜市 12月11日(金) 10:30～
かながわ県民センター会議室 403
- 東京(港区) 12月12日(土) 14:00～
人権ライブラリー
- 東京(新宿区) 12月13日(日) 14:00～
贈呈式 ** 早稲田奉仕園 AVACO 内チャペル

グアテマラ 戦時性暴力の被害者から 変革の主体へ

2009年「やより賞」

「やより賞」の松井ヤナリスの志により設立された「やより賞」は、2009年の受賞者が決まり、12月13日に東京で贈呈式が行われた。「やより賞」を受賞したグアテマラのプロジェクト「戦時性暴力の被害者から変革の主体へ」(Victimas e Injusticia de las mujeres en Guatemala)を代表してマリアナ・チュタさんとアイテ・ロベスさんが記念スピーチを行った。「やより賞」は松浦範子さんに決まった。



(左上) プロジェクトに参加する女性の粘土作品
(上右) 贈呈式でスピーチする、左からチュタさん、ロベスさん
(下) プロジェクトは女性たちの体験を演劇や壁画にするなどの表現活動も行つた

「戦時性暴力の被害者から変革の主体へ」プロジェクトは、2000年に東京

変革の主体へ

「戦時性暴力の被害者から変革の主体へ」プロジェクトは、2000年に東京

「戦時性暴力の被害者から変革の主体へ」プロジェクトは、2000年に東京

変革の主体へ

「戦時性暴力の被害者から変革の主体へ」プロジェクトは、2000年に東京

グアテマラは中央アメリカに位置し、人口1368万人。1954年から85年まで軍事政権が続く。内戦が60年から96年12月まで36年間続いた。内戦中、4400人のマヤの村が消滅し、20万人以上が殺された。そして100万人以上が国内の避難民となった。グアテマラ軍は女性のからだを攻撃の道具として使った。10年間も軍の駐屯地での性奴隷にさせられた女性もいる。ロベスさんは証言する。

内戦時の性暴力は家族、コミュニティに大きな影響をもたらした。性暴力を受けた女性は村の中で孤立させられ、強かんによって生まれた子どもも共同体からつまはじきされた。自分を守るため新しい人と結婚しても、夫に被害者について話すことは不可能だ。

「79年から86年くらいまで凄惨な暴力が続いた。私はボアキルという町に逃げ、ほかの集落から逃げた女性たちとグループをつくった。でも、自分起した性暴力について話さなかった。彼女たちのこともよく分からなかった」

3年前にこのプロジェクトに参加し、「女性の権利について学び、自分が価値のある存在であると実感した。なんといいても仲間の女性たちと性暴力の経験を話さうとすることができたのが大きい。強い信頼関係が結びつくことができた」

プロジェクトの活動の2つ目は、性暴力がなぜ起こるのか、女性たちにとのようならウマを引き起こすのかを理解してもらうための啓発キャンペーンだ。

3つ目は被害女性たちへの補償を求める活動。現在グアテマラ政府によって進められている補償プログラムの「暴力の被害」に性暴力被害を含めるよう働きかけている。

民衆法廷に向けて

そして最後に、女性に対する性暴力を告発するための「民衆法廷」を今年3月に開催することだ。このプロジェクトの当初の目標は、加害者を裁判にかけて処罰を求めることだったが、現在の治安の悪さや諸条件を勘案すると不可能に近いと判断し、民衆戦犯法廷を先に行うことにした。

チュタさんは「ひとりではできないが、グループや仲間が集まって法廷開催にこまめにつくることができる。どうもつれいけれど、悲しい気持ちもある。性暴力を受けているグアテマラの女性たちのことを考えると、彼女たちをここで得たことを何かできればと思う」と少し涙ぐみながら話し、参加者は大きな拍手で応えた。

「ふえみん」(2010年1月15日)に紹介されました

2010年度以降のグアテマラ支援について 1月30日 レコム運営委/グアテマラ支援検討委

2010年度のグアテマラ支援について現時点での検討結果をお知らせします。

レコムでは2009年度を通し、当会の軸である海外支援活動とりわけグアテマラ支援の今後について再検討を行ってきました。4月11日京都での拡大運営委員会における現地報告、議論、提言をもとに、6月13日の総会では、

- ① 2003年より続けてきたコナビグア(連れあいを奪われたグアテマラ女性の会)チマルテナンゴ県地域プロモーター活動費支援を2009年度で一区切りし、
- ②今年度を再検討期間として「グアテマラ支援検討委員会」を設置、
- ③9月に現地視察を実施し、それを踏まえて、
- ④年内に今後の支援方針を提起すること、

を確認しました(8月1日発行『そんりさ』120号同封総会報告資料)。

この総会決議を受けて、グアテマラ支援検討委員会のメンバーを募り、このうち5名で9

月20日～25日に現地視察を実施、現状把握と支援の可能性を探るため、いくつかの民衆組織と地元NGOを訪問しました。その記録は11月26日付『そんりさ』122号に「グアテマラ視察報告」として掲載するとともに、東京(10月24日)と京都(11月28日)で報告会を開きました。

そして去る1月5日、支援検討委員会からも3名参加して拡大運営委員会を開き、2010年度グアテマラ支援活動の柱として、キチエ県で先住民族女性の組織化とエンパワメントに取り組む「希望をはぐくむ女性たち」協会(Asociacion Tikib´al ki´kaslemal Ixq´ib´)を支援していくことで合意しました。同プロジェクトについては『そんりさ』122号「グアテマラ視察報告」の中で紹介していますが(p3, 9-10, 14-15)、具体的な協力の形については引き続き検討を重ね、改めて次号『そんりさ』において報告する予定です。

コロンビア難民再訪

柴田 大輔

二〇〇七年末、エクアドルに暮らすアワ民族のコロンビア難民グループを初めて訪ねた。先の見えない生活に不安を抱えながらも同郷の仲間、家族と寄り添いともに生きる人たちに出会い、リーダーのルイスさんが語る未来への希望を聞いた。あれから一年半後の二〇〇九年七月、再び彼らのもとを訪ねた。

1. 再訪

夏の日本を発ち二四時間。エクアドルの首都キトの空港へ着くと、そこは夜の一時を過ぎていた。標高およそ二八〇〇メートルの夜は、赤道直下の国とはいえ厚手の上着を羽織らないといられない、冷たい空気に包まれている。空港の前で、厚手のポンチョに身を包み、縮こまる客待ちのタクシー運転手たちを目にすると、やはりここは遠いところなのだという事を感じさせられる。あれから一年半、彼らは今、どんな暮らしを送っているのだろう。再び会うことができるのだろうか。

翌日、キト近郊の町マチャチのルイスさん宅へ向かう。電話番号は知っていたが、連絡をしないで行くことにした。突然行つて驚かそうと思つたわけではなく、連絡を途絶えさせてしまつていた後ろめたさが心にあつた。

バスを降り、周りの風景を思い出しながら自宅の前に着く。玄関の前に犬がいる。以前にもいたこの家の犬だ。今もここに住んでい



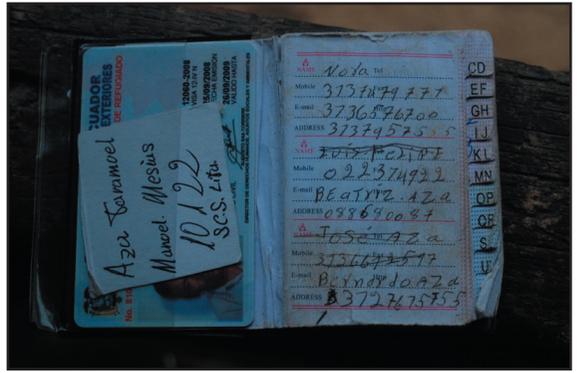
コロンビア難民の女の子。コロンビアの記憶はほとんどない

るのだと思うと、少し安心した。どのような生活を送っているのだろうか。久しぶりに現れた私

にどのような表情が向けられるのか。

少し強くドアを叩く。すぐに中から声がした。名乗ると、開かれたドアからちよつと大袈裟な驚きと笑顔で、奥さんのアンヘラさんが迎えてくれた。「あー神様、ダイスケが来たわー!」なんだか緊張が一気に緩んだ。話を聞くと、数日前に家族の中で私の話題になり、近所のネットカフェから息子のルイス（父親と同名）が私にメールを送ろうとしてくれたと言う。内容は、最近どうしてる？ 今度はいつ頃くるんだ？ といった他愛のない内容だった。どうやら、うまく送ることができなかったようだ。私が突然現れたのはそんな時だったのだ。来てよかったと嬉しくなった。

その日はお互いの、この一年半の間の話を話し合った。父親のルイスさんはここに今住んでいない。家具職人の彼は、七年前にコロンビアから来て以来この町に工房を借り、家族とともに仕事をしてきた。しかし、今はコロンビア国境近くのリタに単身で暮らしていると言う。リタは山間の小さな村で、周辺にはエクアドルのアワ民族や、入植してきたメステイソの小さな集落が点在している。元々、コロンビアのナリーニョ県で、同じ地域に暮らしていた人々が難民となったルイスさん達のグループは、その殆どであるおよそ三〇家族がリタ周辺の集落に暮らしている。将来に対する不安からコロンビアへ戻る人、他の場所へ仕事を求めて去っていく人もいるという。状況の変わらないコロンビアに戻ったとしても、以前暮らしていた所には



手帳に書き込まれたコロンビアにいる家族の連絡先。左側には難民登録証が挟まれている

住めない。コロンビアに残っている家族も苦しい生活を送っている。エクアドルの他の場所でも仕事の無い事には変わりはない。もっとみんなの近いなければと考えるルイスさんは単身でリタへと生活の場を移した。そして、二〇〇九年に入って自分たちの組織を立ち上げ、皆にお金が回るようにグループ全体で収入を得る道を模索し始めていると言う。殆どの人は今も民家の空き部屋や空き家を借り、農場で低賃金での日雇い労働で生活をしている。何とか経済的に自立していかなければと考えるのだ。

ルイスさんが偶然にもその日の晩に、家族の所へ帰ってきた。二ヶ月前、彼にとつて初孫となる長男マルティンの子供が生まれていた。帰



エクアドルで生まれたルイスさんの孫。母親はエクアドル人

宅した彼に、おめでとうと言うと、「オレもこれで、じいさんなんだ」と四五歳の若いお祖父さんの顔に笑みを浮かぶ。一三歳になった三男のクリスティアンは、今にも身長で父親を抜きそうに大きくなっていく。声変わりもして、話した方も少し大人っぽくなっていった。始めたばかりのテコンドーで地区チャンピオンになったとメダルを見せてくれた。

久々に過ごす一家団欒の輪に混じりながら、人の縁の不思議さを感じていた。この日は、キトに宿をとつて来ていたのだが、泊つていけ

いう言葉に甘えさせてもらった。

2. 難民グループが暮らすリタ

アンデス高地のイバラから太平洋岸のサン・ローレンソ行きのバスに乗ると二時間ほどでリタに着く。標高が低くなると共に濃さを増していく山肌の木々をぼんやり眺めていた。いつの間にか眠ってしまったのだろうか、起きるとすでにバスはリタに到着していた。太平洋とアンデスを行き来するバスは、そのちょうど中間に位置するリタで、毎回二〇分程の休憩をとる。その間に食事をしたりトイレを済ませたりするため、国道沿いには食堂や雑貨店が立ち並んでいる。その並びの一番端にルイスさんの家がある。一見して手製と分かる仮作りの扉を開けると、敷地の奥に三畳分ほどの小屋がある。そこが彼の家だ。借りた土地に鬱蒼と生い茂っていた草を自分で刈り取り、家具作りの為の板で家を建てた。家の中には布団が一式と貰い物だと言うテレビとDVDプレーヤーがある。テレビは受信できないため、夜は映画を見ながら寝てしまうという。

仕事場には屋根が掛けられ以前の工房から運んできた機材が置かれている。一五歳の時から作り続けてきた家具には定評がある。また、ここでは町に比べ木材が安く手に入り、田舎ではなかなか手に入りにくい機材を持つていることもあり、家具を作るだけでなく木材の加工や塗装と言った仕事も舞い込み、生活していける分には不自由ないという。ただ、家族と離れて

暮らす寂しさはある。しかし一番下の子供は中学校に上がったばかりであり、これからの教育の事やコロナビアより移住してから七年間を都市で過ごしてきたことを考えると、家族全員でリタに引越すことは難しい。何よりも家族で暮らす為の生活基盤が不足している。ここには電気はあるが水道はない。近所に住む友人の家で食事をし、トイレ、シャワーも済ませます。「いずれはここで一緒に暮らせればいいのだが」と話す。

他の人々の大部分が近辺の農場の収穫、雑草の刈り取り、または鶏や魚、豚と言った家畜の養殖所で日雇いの仕事に従事している。マチェテロと呼ばれる雑草の刈り取りは、他の場所では一〇ドル程度の賃金と言われるが、ここでは五、六ドルと言う低賃金が支払われている。しかし、仕事があるだけでしたと言う環境では、その不当さを訴える人はいない。

最終的には皆が働ける農場を持ちたいとルイスさんは話す。それは、自分たちの子供の世代を含めて、皆が生活していくだけの収入を得ることが出来る形を作りたいと言うことだ。このままでは今の生活を子供の世代になっても続けていくことになる。どこかで変えなければならぬ。そのためには今、一人一人がバラバラになつてしまふわけにはいかない。

今はまだ土地を買う事が出来ないが、できることとして、借りている家の庭先に養鶏小屋や池を作つて魚を養殖したり、他に何が出来るのかを模索している。小さな土地だが主食となる



リタの祭りの日にビールを飲むルイスさん達

ユカ芋やバナナ、収入につながるナランヒージャを栽培する家族もいる。彼は、各家庭で作つたものを組織でまとめて販売したいと考えている。

しかし、多くの人の思いは、そのようなことよりもその日、もしくは毎週末に働いた分のお金が欲しいということにある。日々の生活に追われ将来のことまで考える余裕が持てないでいる。また、まず他人の家に住むのではなく自身自身が持ちたいと言う事と、作物を作るための土地が欲しいと言う事をよく聞く。この二

つがないことが何よりのストレスとなつていようだった。

3. 個人の思い

私が今回とてもよくお世話になつたクララさんと言う六〇歳の女性がいる。彼女は二年前に三人の子供と兄弟友人たちと共にリタへ来た。彼女は当時の事をあまり口にしないが、別の人からの話では、ゲリラの潜伏する村周辺に対して軍による空爆が一〇日間続いたと言う。それ以前にも軍、パラミリタール、ゲリラ各方面から密告者として疑いをもたれる危険、また軍事組織からのリクルートから逃れるために村を離れる人がいた。クララさんたちもその時住み慣れた村を出ることに決めた。手に持てる荷物だけを持ち、身をひそめるようにしながら二日間をかけ、山の中を歩き町へと出た。

クララさんはいつも大きな声で話をする。怒鳴るように話すので最初は怒られているのではないかと思つていた。髪の毛の伸びた私を見ると、「フェオ！（汚い）」と言ひ、クララさんの家で洗濯をしていると、「私がやるから洗濯なんてしなくていいんだよ！」と怒鳴る。笑い声もとても大きい。カメラを向けると、逃げ出してしまうかペロつと舌を出して照れ隠しをする。なんだか悪戯つ子のような人だ。

彼女は日雇いで、農場の伸びた雑草を刈り取る仕事をしている。毎朝七時にマチェテ（山刀）と弁当、替えの「シャツ」を持ち、一三歳の娘を連れて出かける。帰宅するのは夕方四時過ぎ

だ。昼間の気温が三〇度近くになる場所でも一日中マチエテを振うのはとても辛いことだ。掌は分厚く、皺には土は入り込んでいいる。毎日仕事をして帰宅してからも大声で話し元気に笑う。毎日彼女と顔を合わせることが楽しみになっていた。

ある時、私は数日リタを離れた時があった。これはその間のことで、後から聞いたことだ。クララさんは彼女のお姉さん夫婦と一緒に住んでいるのだが、その日はお義兄さんが出かけていて不在だった。その日の晩は女性だけの家で、近所の奥さん達も呼んで、プーラと言う自家製のサトウキビ焼酎を飲んでいたそうだ。大分酔いも回ってきたころ、突然クララさんは泣き出してしまった。コロンビアに帰りたいと言って何時までも泣き続けていたという。皆、クララさんの泣いたところなど見たことがなく驚いたと彼女のお姉さんからその話を聞いた。あの分厚い手で顔を覆う姿が思い浮かんだ。

クララさんは二〇〇七年九月、現在一三歳の娘、一四歳と二〇歳を超えた二人の息子とコロンビアへ来た。もう一人娘がいるが、コロンビアで結婚しそのままコロンビアに残っている。長男はエクアドルで地元的女性と結婚し、イバラと言う都市で生活している。リタには次男と次女がいる。次男は、食事は一緒にとるが、空き部屋のある別の家で寝泊まりしそこから学校へ通う。一三歳の次女は、毎日クララさんと仕事に出かけ学校に行っていない。娘に対しては、将来コロンビアに帰るから行く必要がないと言

う。

私はリタからコロンビアへ行く予定でいた。そのことを話すと、娘に手紙を書くから持って行ってくれないかといつも大きな声で言った。しかし、リタを発つ日も手紙を渡されることはなかった。書かなかったのかもしれないし、一度は書いたけれど再び仕舞い込んでしまったのかもしれない。どんな文章が彼女の頭にはあったのだろう。最後の時まで私は彼女の暗い



暴力から逃げてきた町でやっとの思いで建てた家も、たった一発の爆弾によって崩れ去ってしまった(コロンビア、ナリーニョ県)

顔を一度も見ることがなかった。「次来るときは写真持ってくるんだよ!」大きな声で見送ってくれた。

4. コロンビア・ナリーニョの現状

彼らの出身地であるナリーニョ県は、現在コロンビアで最も危険な地域の一つだ。コカ栽培の盛んな場所では、麻薬がらみと言われる虐殺事件も起きている。ゲリラ、パラミタリーによる縄張り争い、軍による攻撃も激しいという。リタの難民グループ家族が住み、彼ら自身も住んでいたと言うナリーニョ県のリカウルテ、アルタケルと言う町に行くと、現在は落ち着いているというものの、状況の悲惨さを見せつけられる。両方の町を合わせて一〇〇〇人を優に超える避難民がいる。どちらも小さな田舎町だ。先住民のテリトリイは町のある国道沿いから徒歩か馬を使って五時間から一二時間の所にあるという。難民グループの人達が住んでいたところがそこだ。今も人が暮らしているところもあると聞いて、あるコミュニティーの首長に連れて行ってくれないかと頼んだが、そんなこと出来る訳がないとことわられた。外部の人間の出入りのないところで私のような人間がもし見つかれば、案内した当人も政府とのつながりを疑われゲリラに狙われる。またその逆もある。コムニニティーからお姉さんがアルタケルに住んでいる。コムニニティーから逃げ出して、一時はエクアドルに住んでいたが、息子さん病気がかかってしまったこと、難民ビザが下りなかつたことが重なり再びコロンビアに戻ってきた。

その後やっとの思いでアルタケルに土地を買い、家を建てたが、二〇〇六年軍の爆弾を受けあつけなく崩れ去ってしまった。明け方のことだったと言う。幸い家族全員が他の家に泊まっていたため無事ですんだ。しかし、再び家を建てるお金はなく、彼女は今お兄さんと別の家を借り暮らしている。彼女の土地には、彼女の息子夫婦が小さな小屋をたてて暮らしている。彼は母親のためにもっと大きな家を建てたいと言うが、仕事がないとこぼす。不定期な農場での日雇い労働で生活するほかないのだ。

5. 再起へ向けて

全ての人たちは、コロンビアで生活していた時、先住民族コミュニティーの中で自分の土地を持ち、そこで家畜を飼い、作物を栽培していた。彼らの中では、ユカ芋やバナナといった主食となる作物は、自分で作り自分で食べるものだという意識がとても強いように思える。自然の中から食物を作って生きてきた人達のプライドなのかもしれない。何世代も前から同じ土地に暮らしてきた、土地の事を知りつくしている人達だ。新月、満月または、雨季、乾季と、それぞれ時期に蒔くべき種の事、その土地で作るべき作物について全てを知っている。人々の生活もそこから生まれ、作物を中心に営まれていた。行つてはいけな場所、してはいけな事、様々な事を親、祖父母から聞かされていた。自分の土地を持ちそこで作った作物を食す、家は自分たちで木材を調達し組み上げる、そうい

う事が生きる為の当たり前のこととしてあり、それこそが自分自身のアイデンティティーの礎



市が提供する場所で生活する避難民の親子。提供されるのは場所だけで各自で全て用意しなければならぬ。夜には気温が十度を切る事もある。(コロンビア・ナリーニョ県)

となつて思うように思える。

難民となつた今、多くの人が一様に口にする家、土地が欲しいという事は、それを再び手にする事が出来れば失つた自信、心の中の平穩、家族との生活、それらをもう一度回復できるのではないかと言う希望なのかもしれない。

コロンビアの状況は依然としてよくない。もし、ナリーニョの家族のいる場所ではなく全く違う場所へ行くのだとしたらそれは、また始めから全てを始めなければならぬことになる。

エクアドルで立ち上げられた難民の組織は現在、国に登記を申請している最中だ。ここが上手くいけば大きな受け皿となるかもしれない。現在リタ周辺に暮らす三〇家族、一二〇人余りの人達を生活させると言う事は容易なことではないのだろう。しかし、日々の暮らしに飲み込まれそうになりながらも、こうして先を見つめようとしている。先を見つづけている限り、少しずつでも未来が開かれていくと信じていたい。

(完)

『サヨナラ 自ら娼婦となった少女』 現代企画室

ラウラ・レストレーポ著、松本楚子／サンドラ・モラーレス訳

小説の舞台はコロンビア西部、マグダレナ川沿いに開かれた石油基地の町。コロンビア屈指の石油の町には、仕事を求めて男たちが集まり、その男たちを求めて娼婦たちが集まる。ともに社会の極限に生きているといっている



人々だ。主人公はサヨナラと呼ばれる若き美貌の伝説的な娼婦で、男たちのあこがれの的、しかし、彼女にはつねになぞがつきまといていた……。ある女性ジャーナリストによる聞き書きという形式で、今となっては行方知れずのサヨナラの名ぞががつぎつぎに明かされていく。語り手として舞台上に登場する人物は、サヨナラの名付け親である娼婦宿の老おかみトドス・ロス・サントス、少女だったサヨナラを港から娼婦街まで荷車で運んでやり、その後、彼女の人生に深くかかわることになるサクラメント、そしてサヨナラの仲間の娼婦たちである。彼らが語るさまざまなエピソードによって、サヨナラ的人物像が浮かびあがってくるが、同時にコロンビア社会の構造も浮き彫りになる。貧しい娼婦たちの町の近くに隔離された一画があり、そこに石油会社のトップ、北米人経営者たちの冷房完備のプール付き邸宅が並んでいるというのが町の現実だった。劣悪な労働条件に抗議して立ち上がった労働者たちと、彼らの闘争を支援する娼婦たち、そのなかではぐくまれるサヨナラの恋……。熱帯の石油基地に生活の糧を求めるさまざまな人々が織りなす悲喜こもごもが、詩的でユーモアに満ちた筆致で描きだされる。とりわけ、ありのままに活写される娼婦たちの世界

が魅力的だ。

作者はコロンビア最大の石油の町、バランカベルメハで実際に取材をして、「コロンビアが四、五〇社もの石油会社の食い物にされていた時代に若かった」娼婦たちの話を聞き、彼女たちの存在とその世界、悲壮感なしに自分たちの悲劇を語るその話力に魅了されたという。「娼婦といえば暗い面を考えるし、この小説でもそういう面がとりあげられている、でも、魅力的な別の面もあるのよ。彼女たちはだれもが『あたしつてとてもロマンチックなの』と言うわ」。娼婦がしてはならないこと、それは恋だというのが鉄則であるにもかかわらず、彼女たちはいつも恋をしている、とレストレーポは言う。作者が描いたのは、あたりまえの人間としての、生身の娼婦たちの姿だった。

ご存知のように、コロンビアの現実は今もつて非常に厳しい。「いつ殺されるかわからない、国も国民も消えてしまうかもしれない、という状況下のコロンビアで、次の世代のために、小さな断片的なことでも書き残しておきたい」というのが著者の願いである。「私は人々がとても苦しんでいるのを知っているから、彼らにあなたたちの人生は生きるに値する美しいものだし、あなたたちの戦いは英雄的で、そこからきつと何かが生まれてくるはずだ、と言いたい」の「ガルシア＝マルケスを生んだコロンビア文学の、その豊穣な樹の幹から伸びたもうひとつの枝、ラウラ・レストレーポの世界を存分に味わっていただけ嬉し。

(松本 楚子)

ボリビア便り (その3)

藤田 護 (ボリビア外務省外交アカデミー客員研究員)

5. 2009年12月の総選挙

昨年一月六日(日)は、同じ年の二月七日に新憲法が施行されたことに伴う、ボリビアの前倒し総選挙でした。僕は今回ボリビアの政治の調査をしているのではないこともあって、実は三週間日本とペルーのリマに行っていて、選挙前日の夕方に帰って来たのですが、印象に残ったことを少しだけ書き記しておこうと思います。

(ボリビアでは選挙当日の人の移動が法律で制限されているので、当日に帰って来ると家までたどり着けないのではないかと思ったのですが、空港タクシーの運転手の人によれば、選挙裁判所の承認を得ているので、数は少ないが市内までの交通は確保されているらしいです。観光客の人は知らないで到着しますからね)

さて当日は商店の営業も制限されて(ただしうちの薬局は店を開けていました)、車の使用も許可を得ていない限り禁止されているの

で、こんなに穏やかな一日があるのかと思うくらいです。ちなみに酒類の販売も前日から禁止されています。僕は疲れていて、朝食後に二度寝をして、なんと昼前にやっと目を覚ましたのですが、窓の外を見ると思い思いに歩いていく人々が大勢います。多くは家族連れです。全ての店が閉まっていると言っても、投票所の前には食事を出す屋台が出るので、投票に行っていたうちの家族と落ち合ってお飯を食べます(僕は居候させてもらっているのです)。投票所は大体小学校が指定されていて(これは日本と同じですね)、うちの家を出てすぐ横の広場をぐるっと回った次のブロックにうちの地区の投票所があるので、広場を回る辺りからもう人でいっぱい、小学校の入り口の近くは人を掻き分けて進むような感じです。投票には長蛇の列、我々はそのすぐ外の屋台でフリタンガ(fritanga)という豚肉と白トウモロコシ(を茹でたもの)(mote)とジャガイモとチュニーヨ(乾燥ジャガイモ)をトウガラシで煮込んだものを食べたのですが(ちなみにボリビアではこれをスープのようにして食べるものをフリカセfricaseと言います)、僕が食べたすぐ後にもう

なくなってしまうほどの繁盛っぷりでした。

今回の総選挙の結果は、現職大統領のエボ・モラレスと副大統領のアルバロ・ガルシア・リネラが率いるMAS-IPSPが六四・二二%の得票で一位(注1)、マンフレッド・レイエス・ビリヤ大統領候補とレオポルド・フェルナンデス副大統領候補が率いるPPB-Convergenciaが二六・四六%の得票で二位、その他目ぼしいのは、サムエル・ドリャ・メディナ候補の率いるUnidad Nacionalが五・六五%の得票で三位、レネ・ホアキノ候補の率いるAlianza Socialが二・二二%の得票で四位となりました(注2)。

前回二〇〇五年二月の総選挙の結果も、ボリビアで民政移管以降過半数の得票を得て(≡議会内部での投票過程を経ずに:ボリビアのこれまでの政治制度の特徴です)勝利した候補は初めてという意味で画期的だったのですが(注3)、今回の得票は更にその上を行くものでした。今回エボが勝利するであろうということ自体を疑う人はかなり早期の段階からもうおらず、焦点はどれだけ得票率を獲得できるかにありました。結論としては圧勝で(注4)、与党は議会で他の政治勢力の支持を得ずに法案を通す(≡三分の二の得票が必要)ことが可能になりました(これまで上院は反対勢力の牙城となっていました)。

それ以外にも、今回の選挙では幾つかの注目すべき点がありました。一つは、選挙人名簿への登録に生体認証が導入されたことにあります(padron biometrico)。これは従来からの選

挙人名簿に対して登録の重複などの疑念がつきまとい、反対する与党MASとの激しい攻防の中で、二〇〇九年八月一日から一月一五日にかけて極めて短期間で準備が進められ実現したものです。もう一つは、在外選挙の実現です。これも実現が危ぶまれたつも、アルゼンチン、ブラジル、スペイン、米国の四方国で固定投票所と移動式投票所を組み合わせながら（なんとか）実施されました。さらには、今回の総選挙は、地方自治を推進する是非を問う国民投票が行われたことが挙げられましょう。まず県レベルにおいては、以前の国民投票に参加しなかった西部諸県で実施され（注5）、そしてタリハ県のグラン・チャコ郡では地域レベルでの自治（autonomia regional）を推進するか否か、そして全国で一二の市（ムニシピオ）において先住民自治の推進の是非が問われました。これらは、オルコ県のクラワラ・デ・カランガス市の場合を除き、全て可が過半数を上回りました（国民投票では過半数の承認が必要とされています）。

この圧勝の背景にどのような要因が存在すると指摘されているかを把握することは、ボリビアの現在に対する理解を深めてくれるでしょう。まず、二〇〇八年の八月から二〇〇九年にかけてMASがその勢力を伸張し、東部諸県に拠点を持つ反対勢力が力を削がれていった点が挙げられるでしょう。二〇〇八年八月時点では政府と反対勢力はある意味互角であり、国の二極化状態が続いていたのですが、その後東部諸

県が天然ガスからの税収の分配を巡る大規模な抗議行動を展開し、エボ・モラレス大統領はそもそもこれらの諸県に入れない状況まで追い込まれていたのですが、パンド県での衝突で死者が生じ、それがレオポルド・フェルナンデス県知事によるものであるとされたことで事態が一変します。同県知事は逮捕され、反対勢力側は（それまで反対していた新憲法について）交渉の場につくことを余儀なくされます。二〇〇九年四月に、サンタクルスに拠点を持つとされるテロリスト勢力が摘発されたことで、更に反対勢力側はその力を削がれます（サンタクルスの企業家層が和解姿勢を示し、急先鋒であった学生勢力がMASに取り込まれました）。同時にエボ・モラレスも新憲法の制定を巡る交渉、そして新憲法制定後の二〇〇九年初頭の新選挙法を巡る交渉で、反対勢力側の要求を呑み柔軟な姿勢を示しました（それによって憲法と選挙法における先住民主義色（例えば議会における先住民代表の数）が薄まったことも同時に指摘されます）。

次に、今回の総選挙におけるエボ以外の候補の失態も広く指摘されることです。レイエス・ビリヤ候補は、反対勢力側の候補の林立状態であったところから一歩抜け出したところでは注目されたのですが、それ以上の何も積極的に提案することがありませんでした。ドリア・メディナ候補は、政権計画がよく練られているという評価は得られていたのですが、ついに支持を伸ばすことがありませんでした（この人の政治家

としての魅力の無さは、よく指摘されることです）。したがって、選挙戦序盤からエボの勝利は確実視される状況にありました。

最後に、今回は現職の再選が可能であったために、エボが様々な機会を捉えて、そして相当の資金を投入した上で自らの政権の成果を宣伝したことも、つとに指摘されることです。これは国営放送（7チャンネル）の使用も含まれます。

この選挙結果はどのように解釈されているでしょうか。まずは新憲法を中心とするMASによる政治改革の動きが、あるいは共和国から多民族国家（estado plurinacional）への動きが承認され、ヘゲモニーを獲得した、と広範に受けとめられているように思います。二つの勢力とビジョンがせめぎ合う状況に終止符が打たれ、かつての政治家層と政党がほぼ完全に姿を消すこととなります（今回ボリビア革命以来の政党MNRは全く票を得ることができませんでした）。かつてないほどボリビア国家と社会との距離が（社会勢力の連合体であるMASの存在を通じて）縮まったとも指摘されています（例＝La nueva cronica紙）。それは民衆層がナシヨナリズムを担う状況であるとも形容されます（例＝Le monde diplomatique紙）。今後議会は新憲法施行のための多数の法律の制定が当面の課題となり、その中で司法制度における共同体的司法の承認、そして特に先住民の自治の仕組みをどのように従来の自治の枠組みと整合化していくのかが、特に注目されるでしょう。今年

四月には地方選挙が実施されます。

同時に、エボ・モラレスとMASが強大な権力を手にすることになることへの警戒感もあります。例えば、今回の総選挙で国民は（地道な制度構築の道よりも）再びカウディリーヨに自らを預けることを選んだとする論調もあります（El Pulso 紙）。

また今回ますます明らかになったのは、経済面での現政権の達成は、天然資源の国有化と開発の推進、そしてその増収を元手にした各種社会給付金 (bonos) の充実の二点に絞られる、ということのようです。これはMASの政権計画にも街を通っているときの選挙宣伝の看板にも表れているように思います。先住民主義色を表向き強く打ち出しているMAS政権の実際の経済政策は、近代化を目指す開発主義に彩られている、という指摘がなされています（例Ⅱ Le monde diplomatique 紙）。

（参考までに、現地においてボリビア政治の各年毎の大まかな流れを掴むには、入り口としては毎年一二月に主要紙が Anuario と呼ばれる特集冊子を作成するのを参考にするといいと思います。また、定期的に発行される論評紙があり、ラパス市内では El Pulso 紙、La nueva cronica y buen gobierno- 紙（大手出版社の Plural 社が発行しています）、Le monde diplomatique 紙のボリビア版（左派の論調）があり、また最近ではコチャバンバ市で Trapiche 紙が発行され始め、ラパス市内の

さまざまなどころで無料配布されています。また La Pucara 紙は、先住民主義の主張を展開し続ける興味深い取り組みが続いています。これらは、ラパス市内のキオスコと書店をそこそのままに見ていけば入手できます。僕自身が定期的に目をつけているのは、まずはこのくらいです。）

6. 果物の話再び

前回取り上げたりオ・アバホ地域では、一月からラズベリーが採れていたのが、一二月に入るとプラム（シルエロ ciruelo と言います）が採れ始め、一二月の中旬からは梨が採れ始めました。プラムは、最初は黄色いプラムが採れて、次に赤いプラム、そして最後に大ぶりの「日本プラム (ciruelo japonese)」というのが採れ始めます。

梨を収穫するためには、イラニヤ (irana) という不思議な道具があります。これは竹の棒の先端を裂いて、その形を太目の針金を巻いて整えたもので、そこに熟れた梨がうまく入るように下から差し入れて針金をうまく使って切り落とすようにその中に取り込んでいきます。うちの子供達は木に登ってアワユ (awayu) (アンドン風の風呂敷?) を肩からかけながら収穫して、僕が下から横に伸びた枝の先端の方で子供たちが届かない部分を収穫して行きます。梨はふつう洋梨として馴染んでいるのと同じ形なのですが、小さめです。でも黄色くなった梨は

とても甘い。

面白いのは、とりあえず収穫し終わった後に、地面に落ちている梨を別の籠で拾い集めるのです。これはペラ・ハラ (perajala) と言います。前に地面に落ちていて少し腐りかかっているものも拾って行きます。これらは家畜（うちの場合は豚）の餌になったり、雨があまり降らない時期になってくると、腐っている部分を除去して、乾燥させ、キサ (kasa) と呼ばれる飲み物の原料になります。ふつう桃で作るのだが、梨でも作れるらしい。ちなみに木になったまま熟れ過ぎかかっている（中が茶色くなっている）やつはパラッタ (paparrata) と呼ばれます。この家族の家の前がラパスからメカパカへ車が下ってくる際に必ず通る道なので、その前にバスケット (カナスタ) を並べて売っています。プラムは二五個で四ボリビアーノス、梨は小ぶりのがやはり二五個で四ボリビアーノス、普通の大きさ（でも結構小さいが）のが二五個で五ボリビアーノス。でも、かなり頻繁に強気に引き上げたり、大幅な値引きをしていて、毎回値段が違ってきます。そしてこの梨はアルタイプラノまでチューニョやチーズと交換に行ったりする。今ほど市場経済が浸透する以前は、うちの裏の山の上のほうの村々からも交換に下りて来ていたようで、僕がアイマラ語の話を教えてもらったおばあちゃん、そのときにその村人達が語る話を覚えたのだと話してくれました。これはもうしばらく前の話で、娘も孫もラパス市内に出てしまった今、お話を語る機会は

もうなく、本当は昔はもつとたくさん覚えていたらしいと周りの家族は僕によく言います。

この時期は七月に種まきをしておいたトウモロコシ（チヨクロと呼ばれる白い大粒のトウモロコシ）の収穫も始まります。先端まで膨らんで実がしっかりついたものを選んで切り倒して行って、それを引き出してきて、次はトウモロコシの部分だけを切り出して行きます。ふつうこれは茹でて食べるのですが、収穫したばかりのトウモロコシはとても甘くておいしい。茎と葉は家畜の餌になります。

このリオ・アバホ地域では昔はもつと果物が広く栽培されていたらしいのですが、ラパスの富裕層の別荘地用に土地を売却することが続いているようで、毎年別荘が目に見えて増大しています。したがって地域全体が大規模な変貌を遂げつつあって、栽培面積はどんどん減少しているようです。しばらくすると完全に様変わりしてしまうのかもしれない。（おわり）

注1 本来ボリビアでは現職の再選は禁止されていたのですが、新憲法の下で一度の再選が認められることになりました。これが今回の総選挙に関して適用されるのか、それとも今回が新憲法施行に伴う総選挙で次回の総選挙に関して適用されるのか、という点については今後問題が起きるかもしれません。

注2 <http://www.padron.cne.org.bo/resultados09/ResultadosEGR2009.htm>。参考までに、MAS-IPSP は Movimiento al Socialismo - Instrumento Politico para la soberania de los pueblos。PPB-Convergencia は Plan Progreso por Bolivia - Convergencia Nacional。

注3 ボリビア革命以降の選挙では選挙不正が広範に行われていたらしく、その意味では史上初とも言えるかもしれません。

注4 選挙翌日のラ・プレンサ（La Prensa）紙は「ハリケーン・エボ（Hurricane Evo）」という形容を用いています。

注5 東部諸県では2006年に実施されました。

ホンジュラス——クーデターの後の総選挙

二〇〇九年六月二十八日にホンジュラスで軍事クーデターが起こり、マヌエル・セラヤ大統領が強制的に国外退去させられた。その後国際社会からの非難にもかかわらず、ロベルト・ミチエレレイのクーデター政権は居座り続け、セラヤ大統領が復職することなく、ついに一月二十九日大統領選挙が実施された。

クーデター直後にホンジュラス反クーデター抵抗戦線が組織され、労働者、農民、教師、学生、医者や弁護士など社会の広範な層を集め、抗議デモが続けられた。それに対して軍による弾圧が行われ、この間、少なくともクーデターに反対する人々の二八人が殺害され、三〇〇人以上が不当に検挙された。その他多くの人権侵害も、アムネスティ・インターナショナルや、ヒューマン・ライツ・ウォッチ、米州人権委員会など多数の機関から報告されている。クーデターに反対したラジオ局は機材を壊されたり、火をつけられたりしたほか、ラジオ・グロボのオーナーが射殺された。テレビ局のカナル36は攻撃を受け、機材が破壊され、エディターが殺された。

コスタリカのアリアス大統領の仲介で、選挙の前にセラヤ大統領を復職させる議会決議を行うという合意（サンホセ合意）に達したが、結局議会決議はなされないままとなった。

抵抗戦線は、セラヤの復職がなければ選挙は認められない、とし、選挙のボイコットを呼びかけていた。それにこたえて、独立系の候補者が立候補を取り消した。

だが、選挙の実施を自らの正当性の証明とするクーデター政権とそれを支持する政財界は全力あげての投票キャンペーンを繰り広げた。テレビやラジオ、新聞などを通じて投票しない者は「国家の裏切り者」であると連日繰り返し報道された。軍は選挙に先立って、各地方自治体首長に反対者のリスト提出を命令し、反対派狩りをおこなった。

そして投票日

投票日の一月二十九日は、三人以上の軍・警察が出動し投票所を監視した。国際社会からの選挙監視（国連、米州機構、欧州連合、カーター・センターなど）は、選挙そのものを認めないという立場から、監視団が送られなかった。唯一入ったのが、米国政府から資金援助を受けている団体だったが、投票所の外で起こっていたことにはノーコメントだった。

選挙を統括するのは最高選挙裁判所TSEだが、開票が始まっすぐ、そのコンピュータが三時間ほど停止するという「事件」が起こった。その後TSEは、六二%の投票率だったと発表した。が、数日後にはなぜか、その数字が四七・六%に変わっていた。そして、国民党の候補者だったペ・ロボが五六%の得票で当選とされた。

ラテンアメリカの対応

ラテンアメリカ諸国の中では、この選挙を認めたのは、コスタリカ、コロンビア、ペルー、そしてパナマの四国だった。コロンビアとペルーはラテンアメリカで米国からの軍事援助を最も受けて

いる国である。

ベネズエラなど米州ポリバル代替構想ALBAの八カ国（クーデター後にホンジュラスが除名される前は九カ国だった）は、この選挙が「違法で正当性がない」と非難し、南米南部共同市場（メルコスール）の加盟国アルゼンチン、ブラジル、パラグアイ、ウルグアイも「ラテンアメリカの民主的価値観に対する大きな一撃」と表明した。ブラジルのルラ大統領とアルゼンチンのフェルナンデス大統領は、さらに個別に今回の選挙を非難する声明を出した。

米国の態度

米国政府は、ペ・ロボを新大統領として認めるとしている。クーデターが起こって以来、米国はいまいで矛盾する対応をしてきた。オバマは前面に出ることなく、国務省は正式には「クーデター」という言葉を使っていない。また、米政府はクーデター首謀者への米国ビザの停止や、援助の一部凍結などを行ったが、それ以上の強い手段はとらなかった。国際社会がどれほどクーデターを非難し、セラヤの即時復職を要求しても、米国が動かなければ事態は変わらないということを改めて見せつけたことになる。

ベネズエラ、エクアドル、ボリビアといった左派政権と、コロンビア、ペルーといった右派政権の間の溝は今後さらに深まるかもしれない。さらに問題なのは、この米国のスタンスがラテンアメリカ地域の右派政権に暴力と抑圧の手段を行使してもよいというシグナルを発していることかもしれない。

（新川志保子まとめ）

(NACLA, The Real New Network の HP, Revista Envío Diciembre 2009 など)を参照

連載第三五回 『ラミ百景』

伊高浩昭(ジャーナリスト)

第52景

伝記か物語か、冴える魔術的筆致 祖國「ロンビア」の深層も描く

だけの私は友人でも知人でもなく、愛称で呼ぶのはおこがましいが、字数を節約するという記事執筆上の鉄則に基づいて敢えて愛称を用いることにする。ラテンアメリカをラミと書くのも同じ理由からだ。

私は一九六七年にメキシコに渡り、以来四〇数年、ラテンアメリカ(ラミ)を主要な取材対象とするジャーナリストとして生きてきた。その年から翌年にかけてメキシコ市の知識人や学生らの間で一冊の本が大変な話題になっていた。『シエン・アニョス・デ・ンレダー(孤独の百年)』(日本では、後年翻訳され『百年の孤独』として知られる)だった。ノーベル文学賞を一九八二年に受賞することになるロンビア人作家カプリエル・ガルシア・マルケス(一九二七年生まれ)の出世作である。名前カプリエルに父方姓ガルシア、母方姓マルケスを並べた長い氏名であるため、ラミでは記事を書くとき、名前の愛称「ガボ」や「ニシヤル」「GGM」で表すことが少なくない。日本では母方姓マルケスだけで呼ぶ場合があるが、これは正しくない。ペルー人作家マリオ・バルガス・リョサ(MVR)を母方姓リョサないしリヨサで呼ぶのが間違っているのと同じだ。この記事ではガボと書くことにしたい。本人に何度か会い、うち二回インタビューした

ガボが七五歳だった二〇〇二年に世に出した自伝

第一巻の訳書『生きて、語り伝える』(新潮社)が二〇〇九年秋刊行された。出版と同時に国際出版界の話題をさらった。「完結するまで少なくとも三巻になる可能性があり、これは第一巻にすぎない」とガボが口にしたこの自伝は、邦訳で六五〇ページの大作だ。生い立ちから作家・ジャーナリストとして身を立てていく青年時代までを語っている。この作家ならではの諧謔、誇張、皮肉、幻想などを絡めた隠喩(魔術的リアリズム)をふんだんに効かせて描かれている。個人の歴史的事実である伝記なのか、それとも虚構を組み込んだ大河小説なのか、境界が判然としない筆致に引き込まれ、一気に読まないわけにはいかなくなるほど魅力的な内容だ。読者は自伝、物語の両面から読み楽しむことができ、半ば煙に巻かれつつ読み進み、読破してしまふ。この圧倒的な面白さに私は、「ガボは過去を語りながら依然未来に向かって創作しているな」との思いを抱いた。質量ともに圧巻で、出版界の反応は当然だった。類い希な物語作家の面目躍如というところ。

この自伝物語は、ガボが母親と所用で久々に生地アラカタカに一時帰郷する旅から始まる。この生地こそ『百年の孤独』の舞台「マコンド」なのだ。私はロンビア・カリブ海沿岸地方の大都市、バランキージャとサンタマルタの間をバスで往復したことがあるが、標高六〇〇メートル近い大山塊サンタマルタ大雪山の麓のアラカタカには「マコンド」の標識があった。旅人には、アラカタカなのかマコンドなのか判然とせず、どちらでもよくなる。まさに魔術的瞬間に直面するのだ。私は、宿泊したホテルの親切な主人一家に招かれて、大雪山の山中の渓谷でロンビアの名物煮込み料理「サンコチヨ」を食べ、冷たい溪流で泳ぎ、「マコンド」周辺の雰囲気を感じることができた。

ガボは、総延長一万キロにも及ぶ南米の背骨アンデス山脈が始まるロンビアの生まれだが、生涯を貫いてきたアイデンティティーは「カリブ人」である。沿岸のアラカタカに生まれ、バランキージャとカルタヘーナの両市でジャーナリストや駆け出し作家として青年時代を送ったことから、「ごく自然のことだろう。一時期、内陸アンデス高地にある首都ボゴタで過ごすのが、カチャコ(アンデス高地人)とのアイデンティティーの違いを再認識する。

ボゴタ時代の一九四八年四月九日、大統領候補ホルヘ・エリエセル・ガイタンが暗殺され、「ボゴタソ」の名で歴史に刻まれるボゴタ大騒乱事件が始まる。第五章では、政治的暴力の頂点の一つとなったこの騒乱事件を克明に描いている。ガボは何と、暗殺者が群衆に私刑で殺され死体を引き回される現場を目撃した

のだ。そして何と、同じ時刻、現場から少し離れた場所に、ラ米学生会議のキューバ代表として滞在していたフィデル・カストロがいて、暴動に巻き込まれていた。この事実はかなり前にフィデルが明らかにしているが、フィデルはガボのことには触れていない。だから、後に大親友となるキューバ革命の指導者フィデルと、当時は互いに見知らぬ者同士として、この騒乱の巷に同じ日に居合わせたエピソードを紹介している。本書の記述は貴重だ。著者とフィデルはほぼ同年配だが、二人の間にはカリブ海沿岸人という共通のアイデンティティがあることをつかがわせる。だが絆の源には、共有するボゴタソ体験もあつたのだ。後に著名人同士となったガボとフィデルは、ボゴタソを細かく検証する。「ボゴタソの曰こそ、コロンビアの二〇世紀が暮開けた日だと意識した」と、ガボは書いている。二人は大親友となって、すでに半世紀を経た。

著者は「ボゴタソ」の用語を使っていないが、だからこそ、この用語を詠註で指摘すべきだったろう。著者の息子を洗礼したのが、カトリック司祭でありながら〈解放の神学〉を飛び越え、E・L・Nゲリラとして〈革命の神学〉を實踐し一九六六年に戦死したカミロ・トレスだったという逸話も挿入されている。フィデルは、一九五三年のモンカダ兵營襲撃で革命の狼煙を上げたが、「兵器庫を襲って武器を奪い、人民に配布する」という戦術こそ、ボゴタソ体験を踏まえたものだ。

ガボの一連の作品から浮かび上がるのは、コロンビアという類い希な混沌社会の深層なのだ。本書を読んだらためて思うのは、著者とコロンビアの状況が不

可分の関係にあるということだ。スペインから独立して二〇〇年近いこの国は、何回かの小康状態の時期を除き、絶え間ないビオレンシア（内戦を含む政治的暴力）の巷と化してきた。二一世紀初頭の今も、アルバロ・ウリーベ大統領率いる頑迷な右翼政権の治安部隊（軍・警察）、その補完的軍事勢力である極右バラミリタレス（準軍部隊）、治安部隊を支援する米軍特殊部隊顧問団、立法・司法・行政3権と贈収賄で結びつく麻薬組織、そしてコロンビア革命軍（FARC）と民族解放軍（E・L・N）の左翼ゲリラ組織が、複雑に対峙し殺し合う〈低強度内戦状態〉が続いている。このような国は、ラ米二〇カ国のうちコロンビアだけだ。こつした凄惨な歴史の・社会的背景を著者は常に意識している。『百年の孤独』も、そんな風土に根差した大絵巻である。

ガボは一九七〇年代からメキシコ市に移住し、活動拠点にしてきた。ボゴタソに象徴されるようなビオレンシア（政治的暴力）の連鎖を断ち切れない故国コロンビアでは極右勢力から狙われる危険があること、ラ米の北端にあつて文化水準の高いメキシコ市は祖国を遠望し客観視し執筆するのに都合がいいこと、さらには連帯する革命キューバに空路一ツ飛びの近きにあることなどが理由だろう。二〇〇九年一〇月メキシコのウニベルサル紙などの報道で、七八〇年代にメキシコ公安当局がガボを「キューバ政府の宣伝要員」と見なし、電話を傍受するなどスパイしていたことが明らかにされた。当局の書類には、ガボが自作『予告された殺人の記録』の著作権（印税）をキューバ政府に与えることが記録されているという。

本書で面白いのは、著者が家族愛と友情を大切に、貧しさにさいなまれながら大好物の酒、たばこ、性愛、歌、楽器などを味わいつつ濃厚に生き、作家になるという目標に向かつてもがき進む様子が赤裸々に語られている点だろう。才能は学生時代に開花し、出身地アラカタカに近いカリブ海沿岸両市およびアンデス中央高地にある首都ボゴタの三都市での新聞記者生活を経て強靱なものとなる。小説と、ジャーナリズムの手法であるルポルタージュは「同じ母親から生まれた兄弟」との確信に至る。「天職こそがこの世でたつと、愛と拮抗する力を持つ」という格言めいた言葉も生まれる。

第二巻では『百年の孤独』が世に出るまでを語るらしい。すると、ガボとラ米との政治的関わりが登場するのは第三巻になるのだろうか。私は職業柄、その部分を読みちげん待ち望んでいる。この小文では、ボゴタソ以外のエピソードなど詳しい内容には敢えて触れないことにした。自由自在な魔術的筆致を、読者が徹夜を厭わず楽しむのを妨げたくないからだ。一つ指摘すれば、本書を読んで、あらためてガボがコロンビア人であることを認識したということである。

冒頭に書いたように、私は著者に二度インタビューしたことがある。二度目は東京だったが、私が三つか四つ質問したばかりの時に女性記者たちがやって来ると、著者は私に「あなたは今も一八も質問したから、女性記者たちに質問を回そう」と言い、私に通訊するよう求めた。著者得意の（数字の）誇張と〈女性好き〉が図らずも表れた瞬間だった。自伝第一巻が待ち遠しい。

音楽三昧♪ペルーな日々 (第32回) 「踊れ! クンビア・ペルアナ!」

今をときめくペルー大衆音楽の主役は何だろうか。アンデスの民衆音楽ワイノ? クリオ・ヨの心を映すバルス? それとも北米生まれのラテン育ち、世界に羽ばたいたサルサ? レゲエ? ロック? いろいろ

人気のある音楽はあるけれど、今、ペルーで一番熱く、そして近隣諸国への影響力も持っている音楽はクンビアだ。

クンビアはもともとコロンビアの太平洋岸の黒人系音楽の一つである。二〇世紀半ばにラテンアメリカで広く流行した後、各地で土着化が進んだ。コロンビアの渋いクンビアに比べて、メキシコやアルゼンチン、チリなどのクンビアはよりポップだ。しかし、どこよりもクンビアがその多様性を開花させたのは、ペルーではないだろうか。ペルーで今や飛ぶ鳥を落とす勢いで踊られているペルー・クンビアについて、今日はお話したい。

僕が初めてペルーのクンビアを聴いたのは一九九八年。その時は、なんてダサイ曲だろうと思いつつ、単純なリズムとメロディーが頭を離れなかった。気がつけばそのダサイ魅力にすっかりはまっていた。テレビを見て爆笑しながら、鼻歌はクンビアになっていた。

ペルーでは、別名チチャの名前で呼ばれるアンデス色の強いクンビアが六〇年代末から徐々に生み出され、八〇年代には大流行するに至った。当時、ペルーの首都リマは、アンデス地域からの怒涛の移住ラッシュであり、生活の場を路上に求めたアンデスの人々が首都リマを半ば占拠したような状況に陥っていた。治安は悪化し、街の美観は見る影もなく、露天と泥棒と暴力がリマのイメージを塗り替えていった。アンデスの文化をまもって海岸地方の首都リマへと移住した人々は、蔑まれながらもしたたかにこの新天地に自らの場を確立していった。そんな



な中、若者たちが生み出したのが、当時流行していたクンビアと、自分たちのアイデンティティであるアンデス音楽ワイノの融合であった。中でも一九七七年にチャカロンⅡ写真右Ⅱ

とラ・ヌエバ・クレマによって始められた新しいスタイルのワイノ・クンビア、通称チチャは、それまでのワイノ・クンビアを越える人気を博し、以降チチャというエレキギターにティンバレス、シンバルとギロというスタイルが定着することになる。この音楽は、アンデス移住者の中で爆発的に流行し、チャカロンやロス・シヤピスなどを中心に、彼ら自身の境遇を映す鏡として、そしてその思いを共有する音楽としてリマ社会に鳴り響いた。

一方、この状況に昔からの住人であったリマっ子たちは猛然と反発し、チチャを「盗人の音楽」と呼び、汚らわしい音楽であるかのように扱った。実際、チチャの鳴り響く空間は暴力とドラッグがはびこり、治安や衛生的にも決していい場所ではなかった。それでもアンデス系住民にとつて、チチャは、八〇年代の大流行の時期を熱狂と排除の中で自らの場を獲得するための戦いの音楽であり、彼ら自身が生きていく場を獲得する中でなくてはならない音楽であったと言える。

しかしペルーのチチャは九〇年代に入るとサルサの流行やポルビアのネオ・folkローレの流行に押され、徐々に低迷することとなった。変わって勢いを得たのは、ペルー北部のピウラなどを基盤とするクンビア・ノルテーニャである。その代表となるのはアグア・マリーナだ。彼らはブラスセクションを含む大人気でポップなクンビアや、エクアドルのサンファンリートなどをアレンジしたレパートリーで人気を博し



た。クンビア・ノルテーニヨでは、いわゆるクンビアのリズムだけでなく、サンファンニートをクンビア編成で演奏したのもクンビアの中に位置づけている点が特殊と言える。

さらに九〇年代末からは、アマゾン地方出身のロシ・ワーは、六〇年代からチチャと並行して演奏されてきたクンビア・セルバティカ（アマゾン・クンビア）に電子ピアノを大きく取り入れ、トロピカルな雰囲気を中心に押し出した「テクノクンビア」と名づけて大ヒットさせた。九〇年代末からのテクノクンビアは再び大きなヒットとなり、ブラジルのセルタネージャ音楽などを取り込んだルツ・カリーナやロシ・ワーⅡ写真Ⅱに見出されたアダ、人数がどんどん増えていったアグア・ベジャⅡ写真Ⅱなど数多くの人気グループが登場し、テレビのゴールデンタイムに放映された。

チチャからクンビア・ノルテーニヤ、テクノ

クンビアと中心となるクンビアは時代を経る中変化しながらも、それぞれを代表するグループは第一線で活躍し続け、地層のように、ペルーのクンビア市場は成熟していったと言える。二〇〇〇年代に入ってグループ・シンコなどがさらに爆発的なヒットを飛ばすと、もはやペルー国民総クンビア化と言っても良いほどク



ンビアはペルー社会になくはならないものとなった。

また、二〇〇〇年代初めには、二〇世紀末よりアンデス地域のドサ回りで人気を誇った通称「アルパのクンビア」を自称するワイノ系のアルパ歌謡がブレイクし、一気に市民権を得た。アルパのクンビアやクンビア・ノルテーニヨに見られる、こうした「何でもかんでもクンビア

状態」は、ペルー独自の傾向であるが、とにかくクンビアと名付けたい、というこのへんてこな熱意は、クンビアの持つ魔術的な力がペルーで強く働いているのを感じさせる。彼らはいくクンビアに魅入られ、クンビアと共に生き始めたのだろう。七七年のチャカロンの革命的なチチャの発明以降、ペルーのクンビアは今現在までそのあくなき試行錯誤と栄枯盛衰の中で、骨肉化し、ついにペルー音楽としてのクンビアを不動のものにしつつあるのかもしれない。

（水口良樹）

タコのセビチェ (マリネ)

CEVICHE DE PULPO



同じタコのセビチェ (マリネ) でも、メキシコの地域によっては、材料や料理法に多少のちがいがみられる。タマネギを使わなかったり、オリブオイルやニンニク、ハラペーニョと一緒に食べたりする地域もある。トウモロコシのトルティーヤでタコスにするとところもあれば、ポブラノという (辛くないピーマンのような) チレと一緒に食べる例もある。今回は、ユカタンスタイルのタコのセビチェの作り方を紹介したい。

マヤ民族はるか昔からタコを食べて

きた。

現代のユカタンでは、タコのセビチェはパーティーや友人や親戚の集まりなどの食卓にのぼる。長期休暇中の海岸のバーではビールを注文すると小さな皿にセビチェがでてくる。肉を食べられない復活祭前の聖週間にもよく食べる。

私がメキシコに住んでいたころ、訪問客があつたときに母がよくこの料理をつくっていた。また、友人たちとバーで飲むときの格好のつまみだった。ユカタンのバーでは、ビールを飲む客にはセビ

チェなどの料理を出すのが一般的だからだ。

トルティーヤを揚げた三角形のチップスが添えられる。メキシコの多くの地域では、こうした揚げたトルティーヤのことを「トルティーヤ」と呼ぶが、ユカタンでは「トスターダ」と呼んでいる。また、ユカタン原産の唐辛子ハバネロも添えられる。ご存知だとは思いますが、日本人の味覚にはとても辛いので、食べる際にはご注意ください。

材料 (4人分)

- ・生タコ (ゆでダコでも可) 300 グラム
- ・緑のレモン 1個
- ・トマト 2個
- ・タマネギ小 1/2
- ・塩、コショウ
- ・コリアンダー 大さじ3杯
- ・コーンチップス

作り方

- 1) タコを小さく切り、10 - 15分ゆでる。
- 2) トマトをみじん切りにする。
- 3) タマネギをみじん切りにして、2、3分ゆでる。
- 4) レモンを半分に切る。
- 5) コリアンダーをみじん切りにする。
- 6) タコをザルにあげて冷ましたあと、トマトとタマネギ、コリアンダー、塩コショウ、レモン果汁を加えてよく混ぜる。
- 7) コーンチップスと一緒にどうぞ。

ミゲル・アクーニャ メキシコで中学・高校の英語教師をしたあと、1986年に来日。「FM COCOLO」でDJをつとめた。大阪・天満で「メリダスペイン語教室」(<http://www.merida-mex.com>) 主宰。メキシコ料理店を開くため、準備中。

パラグアイ — 大豆生産者が先住民居住地に農薬散布

パラグアイ政府は11月6日、大豆生産者がアルト・パラナ県にあるイタキリ地域の200人のアバ・グアラニ先住民を紛争中の土地から追い出すために、先住民の居住地に飛行機から農薬を散布したという告発が事実であると認めた。この地域の5つの先住民共同体のメンバーが農薬による吐き気などの急性の中毒症状があることを認めた。保健相は大豆生産者が先住民の健康を害しただけでなく環境も汚染したと非難した。

紛争となった2.638haの2つの農園のうち1つは1996年、もう1つは1997年に先住民共同体が土地の所有者として登記されている。だが、大豆生産者側はその土地の権利を1980年代に取得したと主張している。先住民庁（INDI）によればこの事件は大豆生産者が農園に入ろうとしたとき、先住民に弓矢で追い払われた仕返しとして先住民の居住地の上空から農薬を散布したとのことである。

人権擁護組織は大豆生産業者が先住民共同体を脅迫するために農薬を使用したことを非難し、アムネスティ・インターナショナル（AI）はパラグアイ政府に先住民の安全を守り必要な治療を保障し、真相を究明するよう要請した。このような危機は予測できたにもかかわらず、イタキリ地域において先祖伝来の土地から先住民を追い出そうとする脅迫から彼らを保護するために政府も先住民庁も十分な行動をとってこなかった。（noticiasaliadas.org 2009/11/18より）

メキシコ — 米州人権裁判所が女性殺しでメキシコ国家に有罪判決

米州人権裁判所（CIDH）は、シウダーファレスで殺害された3人の女性の事件についてメキシコ国家に対し有罪を宣告した。シウダーファレスでは1990年代以降400人以上の女性が性暴力を受けた後で残虐に殺されており、この問題が初めて国際的に裁かれたことになる。メキシコ国家は殺害された3人の女性や彼女たちの母親の人権を侵害した責任に対し家族に賠償するよう命じられる予定である。原告側は「女性が女性であるということだけで殺される」ことの犯罪性がラテンアメリカで初めて認められた画期的な判決、と評価。

メキシコ政府はまだ判決は知らされていないとしながらも暴力から女性を保護するための対応策などを同裁判所に提出した。2007年に米州人権委員会はメキシコ国家を国際的な人権条約に批准しているにもかかわらず生存権、名誉権、身体的自由、法的保障に関する人権侵害を野放しにしていることを非難していた。（BBCMUNDO 2009/11/20より）

ウルグアイ大統領選 — 元ゲリラ、ホセ・ムヒカが新大統領に

11月30日に行われた総選挙で、与党・拡大戦線のホセ・ムヒカ候補（74歳）がウルグアイの大統領に選ばれた。2010年3月1日就任予定で、ムヒカはウルグアイ史上最年長の大統領となる。ペペの愛称で呼ばれるムヒカは、社会主義革命を目指すトゥパマロス民族解放運動（MLN）の指導者の一人で、軍事政権下で逮捕され民主化された1985年まで14年間を刑務所で過ごした。釈放後は左翼連合拡大戦線FAの創設に努め、1995年に下院議員として当選。現タバレ・バスケス政権では農牧漁業省長官を勤めた。ゲリラ時代からの連れ合いルシア・トポランスキーも下院議員で、今回の選挙で最多票を獲得したため下院議長となる予定。選挙当日は国の北部や西部を襲った洪水で6000人以上の人が避難したにもかかわらず、通常通り実施された。（BBCMUNDO2009/11/29より）

チリ大統領選 — 右派が当選 20年の左派政権に終止符

1月18日にあった決選投票で、航空会社など主要企業を所有する世界有数の大金持ちで野党連合から出たセバスティアン・ピニェーダが当選。得票率51.61%で、野党から出馬したフレイ候補を3%差で破った。20年にわたる中道左派政権が終わる。（BBCMundo.com 18 de enero de 2010より）

**** Información ****

お知らせ

◆「毛糸で奏でる神話の世界—メキシコ ウィチヨル族の伝統アート」◆

日 時：～2月7日（日）まで 10:00～16:00

場 所：観峰美術館（京都市左京区岡崎南御所35）

入館料：600円

◆南米報告 トーク&スライドショー 難民となったコロンビア先住民族の現状と課題◆ ～エクアドルに暮らすコロンビアの先住民族アワ～

日 時：2月26日（金） 18:30～20:30

会 場：アイヌ文化交流センター

（東京駅八重洲南口より徒歩4分・中央区八重洲2-4-13 アーバンスクエア八重洲3階）

お 話：柴田大輔（フォトグラファー）

資料代：500円 ※予約不要。どなたでも参加できます。

連絡先：先住民族の10年市民連絡会 TEL&FAX：03-5932-9515 E-mail：

indy10-Lj@infoseek.jp

共 催：レコム、先住民族の10年市民連絡会、開発と権利のための行動センター

お知らせコーナーについてですが、そんりさは隔月発行で、メ切は奇数月の10日となっています。情報掲載ご希望の方はお早めをお願いします。リアルタイムでブログにて情報発信も行っていますので、こちらもご利用ください。

【ブログはレコムのHP <<http://www.jca.apc.org/recom/>> よりどうぞ】

■フォトコンテスト作品■

レコムで開催したフォトコンテストの応募作品です。次号の「そんりさ124号」で結果発表します。

- 1) 「虐殺された弟の写真をもつ幼子」 清水透さん
- 2) 「秘密墓地発掘コマラパ」 宇田有三さん
- 3) 「アルティプラーノの日々」 片岡桂子さん
- 4) 「マルーカのプロジェクトに集まった女性たち」 など 新川志保子さん
- 5) 「マルーカのプロジェクトに集まった女性たち」 ジョルダン・サンドさん
- 6) 「生産プロジェクトでパパイアを作った家族」 マリア・マグダレナ・シプリアノさん
- 7) 「La Familia」 柴田大輔さん
- 8) 「セルバの声 ペルー・アマゾナス地方」 柴田大輔さん

*2010年1月17日時点作品 到着順

レコム梅村図書館について

貸出を開始しております。目録がお手元でない方は事務局までお知らせください。ホームページにも目録を掲載しています。

会費について

会費期限は「そんりさ」をお届けする際の封筒宛名ラベルに印字しております。期限が来ましたら、事務局よりお知らせを同封しますので、お早めの更新をお願いいたします。

事務局短信

事務局の移転に伴い、電話は常時留守番電話となりました。伝言を残しておいて頂ければ、こちらより折り返しご連絡いたしますので、よろしく願いいたします。

2000年、女性国際戦犯法廷の国際公聴会で証言台に立ったヨランダ・アギラルさん。彼女は、その後の証言ツアーでやってきた京都の拙宅で、マッサージチェアに腰をかけ、目を閉じた恍惚の表情で「私はいま、すごい体験をしているの」とつぶやきました。

彼女の言った「すごい体験」が意味するものを、9年後に、私は見せていただくことになるのです。

この「やより賞ツアー」でお二人が届けてくださったお報せは、アジアのおばあさんたちにも返したい。そしてかの地での民衆法廷の成功を見届けたい。勇気のバトン。この受け渡しに立ち会うことができたこと、力みなぎる思いです。

(やより賞ツアー京都担当)

次回の『そんりさ』発送作業は 月 日(土)の予定です。

参加いただける方は連絡ください。

大変な作業も、みんなでやれば楽しくあつという間です。

レコム・メーリングリストのご案内：会員・購読者は無料で参加できます。

登録したい方は E-mail: recom@jca.apc.org までアドレスを連絡下さい。

ホームページのご案内 レコムのホームページがどんどんリニューアル!

<http://www.jca.apc.org/recom/>

Vol.122 グアテマラ視察報告

Vol.118 エクアドル資源開発と先住民族

Vol.121 ペルー先住民族の動向

Vol.117 エクアドルの先住民族活動家

Vol.120 コロンビア 慢性化した紛争

Vol.116 メキシコ先住民農村は今

Vol.119 ナルコメヒコ メキシコの麻薬

Vol.115 コロンビア先住民族の共同体

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。

入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。

レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000円(学生 5000円) …会の運営、総会での投票、『そんりさ』、資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000円(一口) …資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000円 …『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒616-0004

京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL&FAX 075-862-2556 (留守電)

お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは

は留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

83万 3835円

<グアテマラ基金>

65万 6069円

(2009年12月23日現在)